

三重・伊賀国府推定地

- 1 所在地 三重県上野市坂之下・外山
- 2 調査期間 一九九〇年(平²)九月～一九九一年二月
- 3 発掘機関 三重県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 鈴木克彦・穂積裕昌
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～平安時代後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(上野)

伊賀国府推定地は、上野市街地の北北東、J R関西本線佐那具駅の西側一帯に所在し、柘植川北岸の狭い段丘面に位置する。東方2 kmには全長一八八mの県下最大の前方後円墳である御墓山古墳が、南方5 kmには伊賀国分寺と尼寺に比定されている長楽山廃寺が存在する。

伊賀国府推定地の調査は、県営圃場整備事業に伴う範囲確認調査であり、一九八

八年度に三重県教育委員会が、一九八九年度以降は、三重県埋蔵文化財センターが引き続いて調査を実施している。

当初、伊賀国府は、地理学等により柘植川南岸の印代・西条周辺に比定されていたが、調査の結果、奈良・平安期の遺構は確認できず、一九八九年度以降、対象地を柘植川北岸に拡大したところ、奈良・平安期の大規模な建物群が発見された。現在、範囲確認調査を継続のため、中間的な報告としたい。

主要な遺構群は、柘植川に注ぐ小支流である国町川をはさんだ東西約三〇〇m以上、南北約二〇〇m弱の範囲を中心に広がっている。このうち、国町川西岸の台地上に広がる掘立柱建物群は、柱掘形が五〇～一〇〇cmの方形のものが多く、柱通りの方向が正方位をとるものが多い。これに対し、国町川東岸の台地上に広がる掘立柱建物群は、若干柱掘形が小さく、柱通りの方向も北で西に一〇度以上振れている。

全体的にみて遺物の出土量は多く、遺跡の性格を示す遺物として木簡のほか、完形の須恵器双耳壺、円面硯、産地を異にする多量の緑釉陶器などがあるが、木簡以外はすべて国町川西岸地区から出土している。

木簡が出土した遺構は、国町川東岸の掘立柱建物群の北東を走る幅約八〇cm、深さ約一〇cmの東西溝で、位置的には遺跡の中心部より、かなり北寄りの地点と考えられる。共伴した遺物が子持勾玉一

個とわずかな土器片のみであるため、時期を特定するには困難を伴うが、七～八世紀のものである可能性が高い。

出土した木簡は二点で、他に未使用の木簡状木製品が七点（〇三二型式一点、〇三九型式六点）ある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「 $\vee$ 黒 $\square$ 二升

(104) $\times 24 \times 3.5$ 039

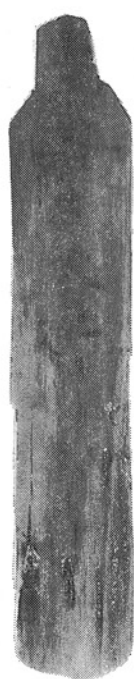
(2) 「 $\vee$ $\square$ $\square$ $\square$ 」

137 $\times 24 \times 3.5$ 032

(1)(2)とも、若干欠損しているものの木簡の上端に切り込みを入れたものである。文字の意味は判然としないが、(1)については、「黒 $\square$ 」という物品とその分量を示した可能性がある。



(1)



(2)

本遺跡を伊賀国府跡であると確定するには未だ証拠が不十分であるが、規格性を持つ大型掘立柱建物群の存在や木簡の出土などで、その可能性は極めて高くなったものと思う。

なお、木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所館野和己氏のご教示を得た。

(穂積裕昌)